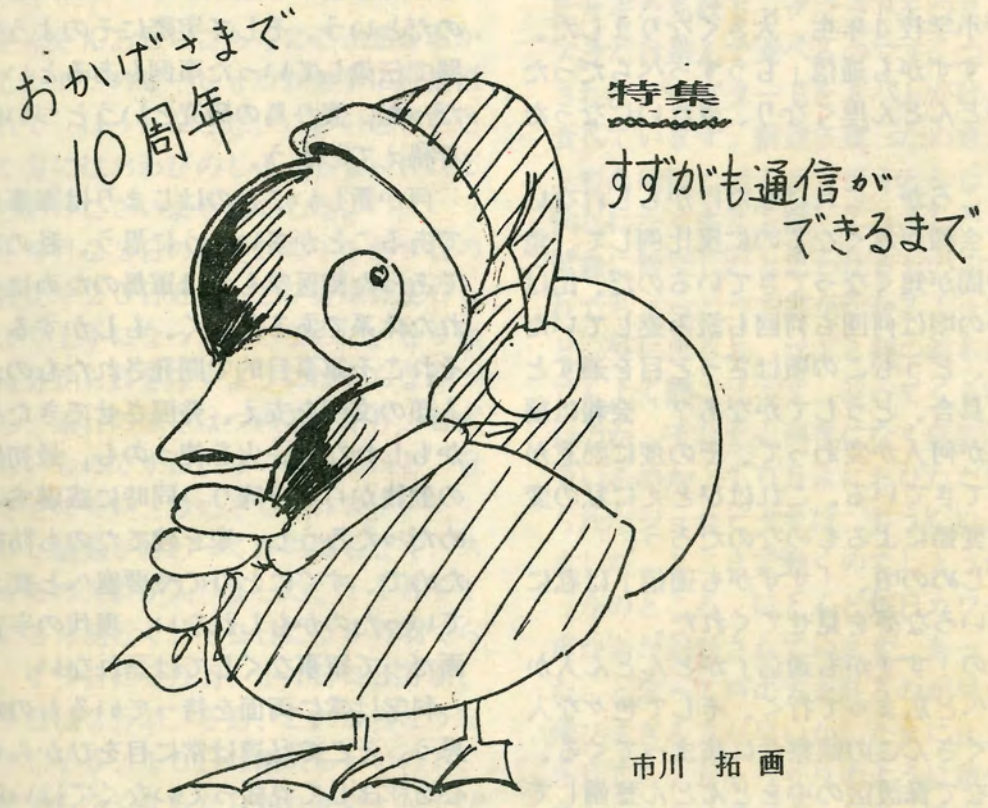
すずがも通信 59号

行徳野鳥観察舎友の会会報

1989年12月1日発行



市川 拓 画

[redacted]

はおと

―すずがも通信10周年にあたって―

鈴木裕子

なんとまあ！友の会がもう満１０才、会報の「すずがも通信」が１０周年だなんて!!そういえばすずがも通信が出はじめた頃まだお腹の中だった、うちの娘が今や小学校４年生。大きくなりました。

「すずがも通信」もうすっぺらだったのがどんどん厚くなり、きれいになったこと。

ところが、これは私だけかもしれないが、会報が厚くなるのに反比例して、読む時間が短くなってきているのだ。出はじめの頃は何回も何回も読み返していたのに、どうもこの頃はざっと目を通すという具合。どうしてかなあ？　会報は編集長が何人か変わって、その度に熱意が入ってきている。これはひとえに私の変化、変節によるものなのだろう。

はじめの頃、「すずがも通信」は私にいろいろな夢を見せてくれた。

この「すずがも通信」がどんどん人から人へと広まって行く。そして色々な人がたくさんこの観察舎に集まってくる。みんなで保護区の中をどんどん整備してどんどん鳥が集まってくる。またそれにつれて人ももっと集まり‥‥どんどん、どんどん夢はふくらんだ。

でも「すずがも通信」は大きくふくらんだけれど、友の会の常連はどうも見慣れた顔ばかり、今一つふくらまない（お腹は出てきたけれど）。もっともっとたくさんのフレッシュな人がきてくれるといいんだけれどなあ。

それには「すずがも通信」がもっともっと熱くなっていなくてはいけないなあ。この間のバンディング論争の時みたいだといいのかしら？　どうも、あれもずれていたという感じがするのだけれど。

私が獣医大にいた頃の教授が、満州の軍部にいた時、渡り鳥を使って敵の馬や牛、その他の家畜に伝染病をはやらせる方法を研究していたことがあるという話を聞いていた。渡り鳥から野生動物に、そして家畜へと伝染していく病気もあるのだという。そして実際にそのような経路で伝染していった事例もあるという話だった。渡り鳥の研究というとつい私は身構えてしまう。

何か新しいことのはじまりは軍事目的であることが多いように思う。私の専門であった獣医学も元は軍馬のために生まれた体系であると聞く。もしかすると、それこそ軍事目的で開発されたものが、人類の文明を支え、発展させてきたものかもしれない。火を使うのも、最初は他の動物から身を守り、同時に威嚇するためだったろうし、家を建てたのも防衛のためで、すぐにとりでや要塞へと変わっていったのかもしれない。現代の宇宙計画だって軍事なくしては語れない。

科学は常に両面を持っているものだと思う。そこで私達は常に目をひからせ、心をすまして見張っていなくてはいけないと思う。

最近ではエネルギーを余分に消費しないよう、羽のないニワトリが作られているという。羽のないニワトリなんて！心の中にざらりとしたものを感じてしまうのは私だけだろうか。

私としてはこの感覚を大事にしていきたいと思う。バランスのとれた科学を取り戻すには、たくさんの人が心の中を一度通過させてみることが必要だと思う。

そしてこの「すずがも通信」はそのための共鳴の場になれると思う。

みんなでもっともっとココロをひびかせたいね。

鳥の国から

蓮尾純子

さんざんあちらこちらにご迷惑をおかけしたトビのピーヒョロが無事に再捕獲されて、ほっとひと息。こわい思いをされた方にはおわびのしようもないけれど申しわけございませんでした。

１０月２２日の脱走から１１月９日の捕獲まで２０日近く。とび方は野生のものより上手になったほどなのに、とうとう自分から餌を探すようにはならなかったし、素行の悪さはつのるばかり。むずかしいものですね。頭のよい鳥ほど、自立させにくい。考えさせられます。

トビ騒動が終わってから間もなく、スズガモの大群が入りました。１１月１１日に２万羽近く、１２日には４万羽くらい、１３日に２万羽、１４日に３万羽、１５日は２万羽。さあ、これからどうなるでしょう。１６日は雨天らしいので、全然入らなくなるかも知れないとひやひやしています。ここ数年、１１月中には大群が見られ、１２月以降に入らなくなるというパターンなので、「今日だけしか見られないかも知れません」とご説明しています。せめて元旦には大群が見たいなあ。

今年の暖かさは気味が悪いほど。そのせいか、カモメの餌付きはまだまだ。それよりゴイサギの方がたくさんいます。アオサギも３羽ほど来ているし、餌場でサギとネコがいっしょにアラを食べている光景はしょっちゅう。望遠鏡でスズガモの大群を見るより面白いみものです。

魚のアラを切る手間を少しでも減らそうと、アラにドッグフードをまぜて増量をはかりました。すると、しゃくなことにサギたちはドッグフードをつまみ出しアラだけ選んで食べるのです。つまみ出されたドッグフードをドバトがぱくぱく食べています。前途多難、ため息。

野鳥病院にはトラツグミとシロハラが例年になく多く入院してきました。窓や電線に衝突したと思われるものです。晴れてちょっとうす雲がかかるような夜など、外に出ると、ツグミ類の渡る声がとてもよく聞こえます。渡ってくる数が多いのか、それとも例年になく低空を飛んでいるのか。１０月末におびただしく見られたジョウビタキは、もうだいぶ減りました。どこまで動くのでしょうか。

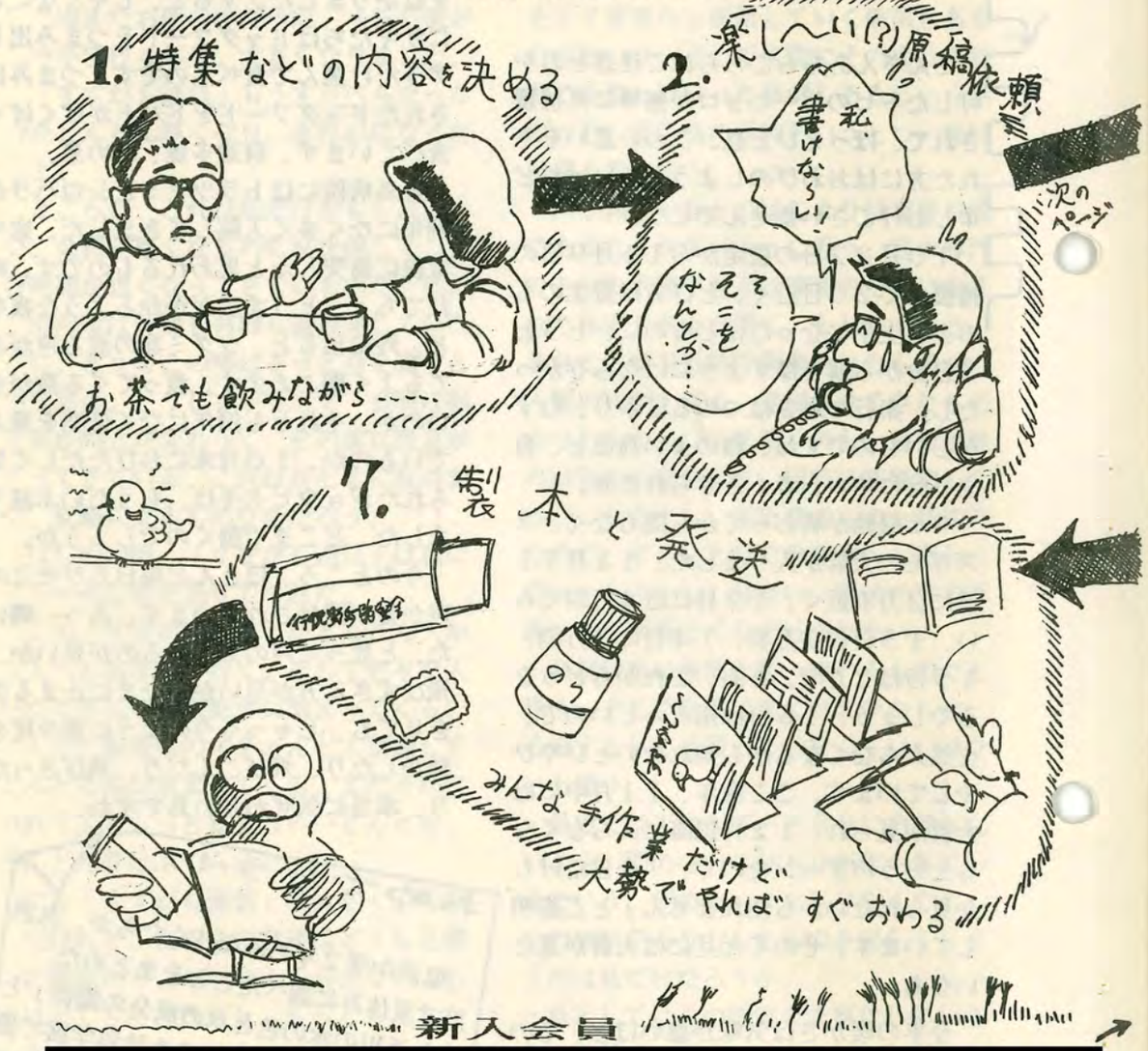
今のところ、ほとんど毎日カワセミの声か姿が記録されています。あっ、鳴いた、と思って声の方を見るのが早いか、飛びすぎる方が早いか。たまに止まる姿を見ても、しゃっくりのように頭や尾を動かしたり、飛びこんだり、飛びさったり。本当に気ぜわしい鳥ですね。

おめでとう！

塩浜中学２年のみなさんたちが、丸浜川で夏休みに調べたことをまとめた「丸浜川の水の色と水の成分の関係」という論文が、市川市児童生徒科学展で優良賞（銀賞）を受賞されました。昨年の阪本卓也さん（県展受賞）に続き、２回目の快挙です。石渡あゆみさん、玉置あずなさん、新藤知希さん、おめでとう！

特集 すずがも通信ができるまで

すずがも通信は、編集はもちろん、印刷から発送まですべて（手作り）。みなさんのお手元に届くまでを市川拓さんの楽しいイラストでご紹介します。



新入会員

[redacted]

[redacted]

住所変更

[redacted]

大きな森の小さな訓練校

森楽正

その4. ひのきの里の夏祭り

梅雨も明け、谷に陽光がもどったころ２日間にわたって、町をあげての夏祭りが行なわれました。駅前に屋台が立ち並び、上松にこんなに人がいたのだろうかと思う位沢山の人出で賑わいました。田舎町の夏祭りですので、余り大したことはやりませんが、木遣りや木曽踊り、花火大会とそれなりに情緒があって楽しいお祭りでした。

また、上松には木曽駒ケ岳の麓に東洋一と言われる砂防ダムがあり、祭りの２日目には、その下でオートバイによるトライアル競技が行なわれました。長野県には全国でも珍しく県警の白バイ隊の中にトライアル隊があって、時々砂防ダムの下の沢で訓練をしているのです。

以前、木曽郡内の王滝村を襲った地震について記憶されている方もおられると思いますが、県警のトライアル隊はその時の救助・復旧活動の為に組織されたそうです。何でも地震の時には小さな温泉街が一つ丸々地中に埋まってしまったそうですから。それと、東洋一の砂防ダムは設計では土砂で埋まるまで十年はかかると言われていたのですが、何と完成から３ケ月後の７月には完全に埋まってしまいました。建設省では、埋まった土砂を掘り出して、また駒ケ岳へ戻そうかと検討しています。（というのは冗談ですが）

まあ、王滝の地震といい、砂防ダムの話といい、木曽谷がフォッサ・マグナの上に存在するということをよく物語っています。

さて、トライアル競技を見た後は、また駅前へ戻り、今度は我々技専のメンバーも「木馬（きんま）引」というイベントに参加しました。これは木製のソリの上に丸太を数本乗せたもの（約三百kg）を５人一組である距離を引っ張って、その速さを競うもので、我々技専は堂々３チームを投入しましたが、残念にも入賞を逃してしまいました。

その後は、町の商工会で出した振舞い酒に群がり、我々の校長にごちそうになって（たかっていたという話もありますが）、駅前の駐車スペースの片隅で、アスファルトの上に車座になっては飲んで騒いでいました。ああ、失業者の群れはこわい。

こうして楽しい祭りの夜は更けていきました。翌日は授業だというのに‥‥。

＜上松の鳥＞（？～9/24）
アオサギ－9/9 木曽川本流上空を通過
トビ・キジバト・ヤマセミ・コゲラ
ツバメ－9/20頃 50羽前後の群れが通過
セグロセキレイ・ヒヨドリ・カワガラス
エナガ・ヤマガラ・シジュウカラ
ホオジロ・ムクドリ・カケス・オナガ
ハシボソガラス
○リス、ノウサギ、ヘビsp。

その5. 御家庭で簡単に？できる家具造り

十月初めに色づき始めた山々も今や真赤に燃え盛り、10月19日に霜が降り、22日にはジョウビタキもやってきました。訓練校の実習も３作目に入りました。そこで今日は、我々が学んでいる家具の造り方について、少し触れてみたいと思います。

家具の製作工程

木取り

ａ；木取り表の作成

設計図を元に、部品寸法に削りしろなどを歩増しして、木取り表を作る。

ｂ；木取り

木取り表を元に材料に部品の形を書く。各部材は、外部から見える部分か見えない部分か、強度などを考え、適したものを選ぶ。

＊材料は丸太で買い、自分の思いどおりに製材してもらう場合と、製材したものを必要に応じて買う場合とがあります。

２　木づくり

木取りした部材を加工して、必要な寸法にする。まず基準面を造り、それに直覚な第二面を造り、厚さと幅を決め、長さを決める。

３　墨付け

外部から見える部分、見えない部分を考え、部品の位置、上下左右を決め印をする（勝手墨）。勝手墨にしたがい、ほぞ、ほぞ穴、溝、欠き取りの位置や形状の加工墨を付ける。

４　加工

加工墨に基づいて、正確に加工する

５　仮組み

ほぞなどの接合部の加工精度を確かめたりするために、接着剤を付けずに仮に組み立ててみる。

６　水引き

加工中に生じた機械のローラー跡、つちや圧縮器でへこんだ部分を、元にもどすために、軽く水分を表面に与える。

７　仕上げ

水引きにより、圧こんなどが元にもどったら、部品寸法が変わらないように削り仕上げをする。

８　組立て

接着剤をつけ、全体のねじれや角度を正確にして圧締する。接着剤が乾燥硬化するまで静止しておく。

９　素地調整

接着剤の余分なもの、手あか、汚れ等を取る。

接合部の段違いをかんなで削り平滑にする。

サンドペーパーでかんなの削りむらや逆目等を十分に研磨する。

10　塗装

11　仕上がり調整および付帯具取付け

家具の製作工程は、だいたい以上のとおりであるが、製品によっては、工程が

（次のページへ）

重複したり、また簡略されたりすることもある。

今までに私が造ったものは、高さ400(mm)×間口620×奥行360、引き出し４杯扉付の整理箱、高さ1200×間口968×奥行460のチェストで、今は３作目の曲木の椅子を作っています。

他には文机、長火鉢、ベンチチェスト座卓、縦長の整理箱、姿見等が完成しています。まだまだ、ローチェスト、食堂セット（椅子、テーブル）、ライティングビューロー、ロッキングチェア、サイドボードなどが製作中です。これらは来年３月10日の展示即売会に出品されることになっています。

＜上松の鳥＞
トビ・コジュケイ（声）・キジバト・コゲラ・セグロセキレイ・ヒヨドリ・カワガラス・ジョウビタキ・エナガ・ヤマガラ・シジュウカラ・ホオジロ・スズメ・カケス・ハシボソガラス

クリスマス・お年玉に「すずがも通信」
…おともだちにプレゼントしませんか

１年分（隔月発行・年６回）の「すずがも通信」をおともだちにプレゼントしませんか。「○○様から☆☆様へのプレゼントです」というご挨拶を添えて、会報をご指定の方に送らせていただきます。どうぞご利用ください。
（プレゼント会員：年会費１０００円）
プレゼントしてくださる方は、次のどちらにされるか明記してください。

１年限り：１年後にご挨拶をお送りし、あらたにご入会いただくか、会報送付を打ち切る
プレゼント継続：１年後、プレゼントしてくださった方に会費の納入をお願いする

その6. 手作りの音
―荻原小の子供たち

谷の紅葉も盛りを過ぎ、木曽では日毎に冬が近づきつつあります。初冬の長雨が上がったある日、荻原地区にある荻原小学校に中沢準一先生を訪ねました。

荻原小学校は、上松の町の中心から南へ車で５分程行った国道沿いにあり、木造の校舎と近代的な体育館のある素敵な学校です。中沢先生はこの荻原小で、子供達に弦楽器の作り方を教えています。先生が考案した道具や工具を使い、小学１年生の時にバンドーラという素朴な弦楽器を作り、３年生から４年生にかけては、何と!!　バイオリンを作るのです。

僕は、千葉にいたころ、新聞で、授業に楽器作りを取り入れている中沢先生の記事を読み、上松に来たらぜひ御会いしたいと思っていました。今回、ようやくその念願が叶ったのです。きっかけは、夏の終りに町の野外音楽堂で行なわれた「ラテンフェスティバル」でした。僕等は、町の人から頼まれて、その舞台背景作りと、当日の手伝いをしました。その時に、荻原小の子供たちと中沢先生が手作りのバンドーラとバイオリンを持って参加し、素晴らしい演奏を聞かせてくれました。当日、先生に声を御掛けして、今回の訪問となりました。

中沢先生は、松本と開田高原の小学校におられた時も子供達に楽器作りを教え現在は、上松の荻原小で７人の４年生にバイオリン作りを教えています。子供達がケガをしないようにと、大人の使うものとは違う道具で、時間をかけて、本当に素晴らしい音色の楽器を生み出し、演奏も教えているのです。子供達の小さな手でノコギリを挽き、ヤスリをかけ、彫刻刀で彫り、ニカワを使って接着し、象眼までやってしまうのです。そして３０数回もニスをかけては研磨し、弦を張るまで一年以上をかけて、世界に一つしかない、自分だけのバイオリンを作り上げるのです。

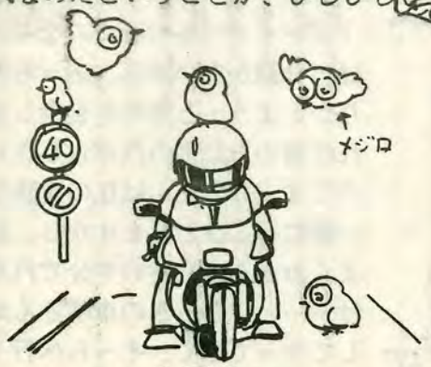
中沢先生のバイオリン作りは、ほとんどが独学で、大人のような道具の使えない子供達にも、完成度の高い、きちんと音の出るものを作らせてあげるために、イタリアのストラディバリウスの遺品を展示してある博物館にまで出かけて行く程の勉強家なのです。そして延々４時間にもわたり、バイオリンの製作工程のこと、その歴史、イタリアでの写真、ストラディバリウスの墓石の拓本、子供達の製作風景のビデオまで見せて、見知らぬ僕等を歓迎し、楽しそうに説明してくれました。

中沢先生は、心から子供が好きで、バイオリンが好きで、音楽をこよなく愛している人なのだということが、ひしひしと伝わって来ました。同じように「物作り」を目指す者の一人として、その情熱には、本当に見習わなくてはいけないと思いました。

まだまだ、こんなに純粋に子供の事を考えられる先生のいることを知って、とてもうれしくなりました。「すずがも通信」をごらんの皆さんに、子供達の演奏をお聞かせできないのが残念ですが、またいつか、新聞に子供達と中沢先生の記事が載ることもあると思います。もし、そんな記事を見つけたら、そっと目を閉じてみて下さい。きっと、遠くに子供達と中沢先生が奏でる素晴らしい弦のしらべが聞こえてくるでしょう。

＜上松の鳥＞
トビ、キジバト、コゲラ、キセキレイ
ハクセキレイ、ヒヨドリ、カワガラス
ジョウビタキ、エナガ、ヤマガラ、
シジュウカラ、ホオジロ、スズメ、
カケス、ハシボソガラス

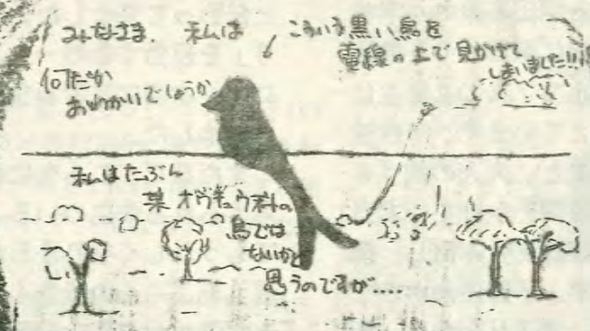
シンポジウム
「都会の鳥たちの夜」　都市鳥研究会
日時　1990年1月13日　15時～18時30分
場所　立教大学４号館（３階4304号室）
　　ＪＲ山の手線池袋駅西口下車５分
資料代　３００円
連絡先　[redacted]　川内　博
☆都市鳥研究会はトヨタの研究コンクールの前回最優秀賞受賞グループです。



目白通り なんてね

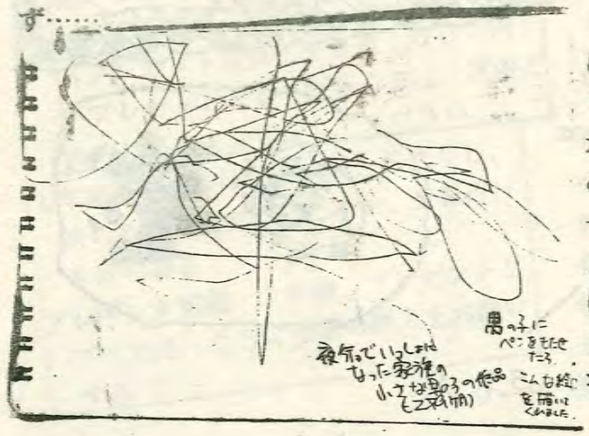
インドひとり旅

その5. 鈴木弟伊



とても寒かった汽車の中、やっと夜が明け、一緒の家族連れは降りてしまって私一人に。寝台をもとのように座席にもどし、外をボーッとながめると、夜のうちは暗くてわからなかった車外の景色のなんとのどかなこと。黄褐色の砂、乾燥地らしい植物、ぽつぽつと建つ小さな家あのデリーの騒がしさがウソのよう。今までずっと身を守ることに必死だった私は（今さら？）旅行者気分、うきうき！

……ところが、ところが、なんです。すっかり明るくなり、気温も上がってきて、ますます楽しい気分の私をのせた汽車が、突然、止まってしまったのです。はじめは事の重要性に気付かず、信号かなんかだろうと思っていたのですが、そしが１時間経っても停車したまま。外をみても駅は影もカタチもないし、それどころか人家らしきものもあまり見あたらず……



それでも、これまでの事件（？）で相当に鍛えられてきた私は、“インドだもん、こんなこと位、へん！”とタカをくくっていたのです。１時間半、２時間、日は高く上り、何やら外が騒がしくなってきた、と思ったら、ドアをノックする音。開けると、ごましお頭にごましお不精ひげのかなり年配の車掌さんが立っていて、不明瞭な英語らしき言葉で、何か言う……うーん、何だろう。と、カバンを持った見知らぬおじさんが、そのわきから個室に入ってきて、こちらは私にもわかる英語で、「事故があって、汽車は動かない」と。で、そのおじさんはそのまま私の向かいの席に座ってしまい、親しげに何やかんやと話しかけてくるのですが、疲れている私は対応が面倒臭くて適当な相づち。

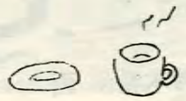
そのうち、おじさんは立ちあがって、「ジャイプールへ行くのなら、この汽車は当分動かないから、あっちの汽車に乗りかえよう」と窓の外を指しまして、みれば前の方に別の汽車らしきものがあるのです。おじさんは私の荷物を持って、一緒に行こうと私をせかし、私は何だかよくわからず、疑い半分で汽車を降りかけ……と、さっきの車掌さんがコワイ顔してやってきて、そっちへ行ってはいけない、と不明瞭ながらに言うのです。

おじさんは一人で行ってしまい、私は車掌さんと一緒に自分の席に戻りました「この汽車は動かないから、あっちへ乗り換えた方がいいって言われたんですけど」と言っても、わからないような表情でにこにこするばかり。

ま、いいか、と腹を決めて、そこに座ると……車掌さんが私にチャイを持ってきてくれまして、あとで高い代金請求されないかしら、なんて疑いながらそれを飲んでいると、ビスケットを持ってきてくれ、毛布を持ってきてくれて、座席にしいてくれ、おまけに自分もとなりに座りまして……で、はじめは何か話したり私のスケッチブックをとりあげて、そこに絵を描いたり。そのうち、私の頭をなでたり、肩に手を回したり、ほおにキスしたり、私が手をつけてないビスケットをとりだして、私の口に無理に押しこもうとしたり。

さすがの私も気色悪くなってきて、奥さんいるんですか？　子供さんは？　とか話題をつくろうとしたのだけれど、何をいっても私の言ったことをオウム返しに言って、にやにやーっ　と笑うばっかり。

状況は何だかさっぱりわからない、頼みの車掌さんがこの様子、周囲には見渡限り街らしきものはなし、一体どうしたらいいんでしょう!!



半分泣きべその私の耳に、部屋の外から女性の声、それも英語！　すがるような気持ちで飛び出すと、はたして、若い金髪の女性がデッキでインド人と何やら話をしていたのです。彼女は私に気づくと、“ハイ！”　と気さくに話しかけてきて、この列車が脱線で止まっていること、今、機関車をどかして代わりにディーゼル車を連結しようとしていることなどを説明してくれ、“とはいってるんだけどほんとにこの汽車、動くのかしら”と肩をすくめました。さすがは日本人の私のブロークン・イングリッシュとは違う、生まれながらの英語人にはインドなまりの英語でも正確にわかるんですね。

とにかく私はほっと１息、２息。「車掌さんがさっきからべたべたとしつこくて困っているのだけど」と言うと、「じゃ、うちの部屋にいらっしゃいよ」そこで、彼女と、グレアムというボーイフレンドの２人の個室にお邪魔させていただきました。あれこれおしゃべりしているうちに、あれっ、いつの間にか窓の景色が動いてる！　列車が動いてる！

２人はイギリス人で、彼女はインドは初めて、グレアムはなんと４度目とのこと。私は日本人だというと、グレアムは“Why India？”（なんで、インド、なんだい？）とききました。私が返答に困っていると、“Cheap Vacation？”（安上がりの休暇を過ごすため？）　と、わずかに皮肉をこめて微笑みました。同じアジアでも日本とは全くちがうし、歴史も古いし、と色々いいわけを並べると、“そりゃ、日本と全くちがうのは、どこの国でも同じだろうさ”

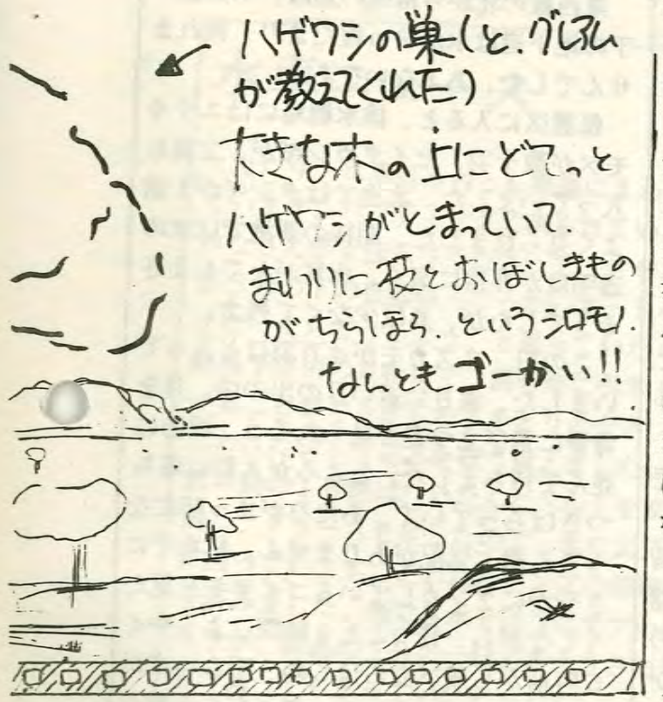
—Why India？　その後、ずっと私の心にひっかかっている一言です。はたしてグレアムはその答えを持っていたのでしょうか。やはり私も、チャンスさえあれば、また何度でもインドを訪れてみたいと思っているのですが、なんでインドなのか、何がそんなに魅力的なのか、いくら考えてみても、明確な答えが浮かんでこないのです。

鈴木希伊 画

グレアムはバードウォッチャーでもあり、車窓からみえる鳥たちについて、色々と教えてくれましたし、また日本の鳥についても話をしました。

車窓から見えた鳥たち。何分、車窓からなので、大きくてハデな鳥しか目につかなかったのですが、まず、インドクジャク。オスメスとりまぜて、その辺をうろうろしていて、すごくヘンなかんじ。次に目につくのがハゲワシ。種類はよくわからなかったんだけど、大きな黒いゴミ袋みたいなのが、あちこちに、どてっととまっていたり、ぶわーーっと飛んでいたり。巣らしきものも見ました。

鈴木希伊 画



線路ぎわの電線にとまっていた黒い鳥（これはイラストをみて下さい！）。水たまりにはセイタカシギとソリハシセイタカシギ、その他、ムナグロなんかの仲間とおぼしき巨大なチドリなど。

10ページ上

鳥にみとれていて、ふと我にかえるとひざの上のスケッチブックが砂でざらざら。あらためて外をみれば、風景がピンク色。砂を含んだピンクの空、ラクダも歩いている……ラジャスターンに入ったんだ！

それにしてもすごい砂。はじめはそれを楽しんでいた私たちも、あまりのすごさに窓をしめてしまいました。線路わきに道らしい道がみえ、人家が増えてきたな、と思っているうち、汽車はジャイプール駅へ着いたのでありました。

やっと、やっと、ラジャスターン州に入りました。本日、1988年12月23日、インドへ着いてまだ３日、まだまだ序の口です!!

ジャイプールにたどりついて、ほっと一息、一難去ってまた一難……は、次回のお楽しみ。

鈴木希伊 画

（おわび）前回、汽車の中で、一緒になった家族の小さな男の子が、バナナを指して“ケラー！”とぐずりだした、という内容を書きましたが、ケラ：kela　とはヒンディー語でバナナのことなのです。注訳を忘れていました。ごめんなさい。

今月の新浜から

新浜自然観察会（１１月１２日）

好天にめぐまれ、Ｔシャツでもいいくらいの気温。風もなく、のどかないい日でした。参加者も約５０名と多数。

江戸川放水路にはハゼ釣り舟が多く、鳥のいる場所はわずか。でもハマシギは３００羽あまり見られ、冬の水鳥を見ながらほのぼのとお昼を食べました。

今年は雨が多く、妙典の埋立地は水たまりがたくさん残ったため、初秋は数百羽のシギ・チドリが入っていました。この日にはツグミやジョウビタキなど、荒地の冬の小鳥たちが見られました。

１０月末から１１月上旬は、冬の小鳥たちがこの付近をさかんに通過する時期にあたります。例年よりずっと暖かいのですが鳥の渡りは気温とはあまり関係がないようです。世界をまたにかける鳥たちのこと、一地方の気温の上下で渡りの時期をずらせたりしては危険なのでしょう。ジョウビタキが何回も見られたほかオオジュリン、アオジ、ツグミ、ウグイス、シジュウカラ（行徳では冬の漂鳥）など、にぎやかでした。

東西線の北から南への通路、引込線の下の地下道は水が２ｍ程たまり、渡れませんでした。あぶないなあ。

保護区に入ると、排水機場にはユリカモメが数十羽、セイタカシギが１２羽も入っていました。北池ではタシギが１羽よく見られました。期待の新池では水の透明度が非常に高く、水質がとてもよさそうでしたが、鳥は少なくて残念。

この日、スズガモが４万羽ほど入っていました。満月に近い月の出の頃、月を背景に飛び立つ姿が見られそう。堤防に並んで待ちました。ところが大群は落ちつきはらっていて、あたりがまっ暗になっても飛ぶ気配がありません。餌場でにぎやかにケンカしているゴイサギを見たりしながら、待つこと１時間。ようやく６時前から飛び立ちはじめ、明るい市川塩浜駅のライトの前をつぎつぎに大群が通過して行きました。月面を横切る群れもあり壮観でした。１日のしめくくりにふさわしいページェントでした。

（東　良一）

バンディング速報

１１月１２日の日曜日、北池でクイナが１羽捕獲されました。この鳥は今年の４月６日に同じ北池で捕えられ、標識足環をつけられたものでした。どこかで夏を無事にすごし、また保護区に戻ってきてくれたのです。こういう例を「リターン；同じ場所で半年以上後に再捕獲されたもの」と呼んでいます。このほかに、「リピート；同じ場所で同じシーズンのうちに再捕獲されたもの」、「リカバリー；５キロ以上離れた場所で再捕獲されたもの」という区別をしています。

クイナくん、冬中ずっといてくれるといいですね。

今年はとてもカワセミが多く、７月から今までに６羽も標識放鳥されました。新浜鴨場で夏中ずっと住みついていたというお話をうかがいました。もしかすると、繁殖していたのかも知れません。

市川　拓画

水車ニュース

ただ今、水車は３台とも順調にまわっています。バンディングで来られていたみなさんが手伝ってくださって、せせらぎ３号の下の自転車（でっかいオートバイだったらどうしよう、と思っていたら結局子供用の自転車で、割合楽に引き上げることができました）をとりのぞき、こわれたジョイントを取り換えました。最年長の１号機は、いたんだベルトを交換し、グリースを足したので、また元気に回っています。こわれたポンプの修理も済みました。何でも水を送りだすプロペラが、新品の三分の一ほどの大きさにすり減ってしまっていたそうです。

ポンプも水車も快調、新池の水もきれい。ただひとつの悩みは、池の鳥の少なさ！　１０月まではサギがどっさり入っていて、カダヤシがつくだ煮にできるほどうじゃうじゃ泳いでいたのに、１１月に入るとコガモやコサギがぽつり、ぽつり。「水がきれいだから、餌があまり出ないんじゃないの」「カダヤシがふえたからユスリカが減ったんだよ」「カモには浅すぎるかも」「シギには深すぎるのかな、ふしぎだ」

次回の観察会の時は、水を思いきり減らしてシギが入るかどうかを見ることになりました。

１１月１１日のこと、池の水生生物の調査に行った人たちが、すきとおったエビを捕まえました。見たところ、テナガエビの仲間のようです。誰も、これまでにこんなエビを放したおぼえはありません。すぐおとなりの旧淡水池から引っ越してきたのか（間に土手があるので、ちょっとむずかしいと思われる）、汽水域のエビが海から上がってきたのか（サイフォンによる流れはごく浅く小さいものだが、うらぎく湿地のところで海に届いている）、それとも丸浜川からポンプで運ばれたのか（新浜鴨場の前のよくフナ釣りをしている水路から丸浜川に水が流れこんでいるので、可能性がないわけではない）。小さな幼生の時に、泥や水とともに水鳥に運ばれたのかも。おそらく海から入ってきたらしい小さなハゼとともに、詳しい方に見ていただいて種類を調べることになっています。

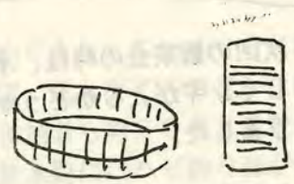
いつの間にか、色々な水生生物がふえてきて、新池はひとり歩きをはじめているのですね。すごい！

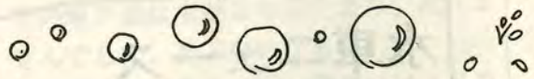
市川　拓画

水を考える３

洗剤のＣＭは・・・・・

寺田一哉

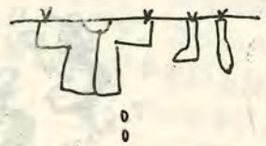




最近、帰りが割合と早くて、ゴールデンタイムのテレビを見る機会が多くなっています。すると、洗剤のＣＭが目につきます。主婦が対象の商品なので、深夜には目にすることのないＣＭをやっています。

しかし、見ているうちに、消費者をバカにしているようで、腹が立ってしようがなくなります。合成洗剤は、テレビＣＭで売る商品と言われています。ＣＭの出来・不出来が売れ行きにそのまま響くというのです。したがって、ＣＭが流れる量も多く、洗剤の価格の何％かは、広告料に当てられているとされます。広告を買っている分もある、と言えるかもしれません。

何気なく見ていると、「新しい製品は、いままでの欠点のあるものに比べると、とても良くなったから、新しいのをお買いなさい」と、言っているのです。何だか、『いままでの製品が欠陥品で、それを買わされてきた』としか、思えないのですが。でも、その前は、欠点があるといっているような製品を、「非常に良いものですよ」といって、宣伝していたのです。なんだか、だまされていたようで、不快感が増してしまいます。しかも、ＣＭで良いというほどには、汚れの落ちが良くないものがあると、家人が不機嫌に言っていました。



一番ひどかったのが、『再付着防止剤を配合！』というものでした。これを見た時は、あきれてしばらく考え込んでしまいました。「阿呆！馬鹿！人でなし！…」といくら罵声（ばせい）を浴びせても、気が落ち着きませんでした。それ以前に、やり慣れないことで言葉が浮かんでこなくて、いや語彙（ごい）が少ないことを暴露してしまいました。これは子供も読んでいるので、これでやめます。さて、本論にもどりますが、納得できなかったのは、再付着防止剤の入っていない合成洗剤なんて、考えられないからです。

洗剤の役割というのは、水で落ちない油性の汚れを、①洗濯物から取り除き、②その汚れを洗濯物に再度付かないようにする、ということです。そのために、前々回にふれた助剤（ビルダー）が含まれていて、②の役割を負っているのです。したがって、新たに配合したというのなら、いままではどうしていたのか、よくわかりません。なんとも、バカにされているとしか、思えません。

また、全自動洗濯機専用洗剤というものがあります。全自動洗濯機は合成洗剤を使うことを前提としています。にもかかわらず、ＣＭでは今の洗剤の欠点を指摘しています。全自動でなくても、使いにくいのではないでしょうか。私の友人に全自動洗濯機を石鹸で使っている人がいますが、石鹸の利点が活かされているか不安があります。また、全自動洗濯機は一見便利そうですが、水の使用量が多いなどいろいろと問題点が指摘されています。

今の洗濯機は、全自動かどうかはともかく、合成洗剤に適したようになっています。洗濯機と合成洗剤は、相互に依存しあって販売量を伸ばしてきたようですが、よく考えてみたいものです。残念ながら、今の日本には日本の一般的な水質に合った、そして、石鹸に適した洗濯機はないようです。ヨーロッパ製の洗濯機は硬水向きですので、軟水の日本向きではありません。川や海のためにも、石鹸用の洗濯機があってもよいのではないかと考えているのは、私だけでしょうか。

ともかく、洗剤のＣＭを目にすると腹が立つことが多くて困ります。

おわび：前々回、しっかりすすぎをしましょうと書きましたが、水によっては長時間のすすぎが、黄ばみの原因となることがありますので、注意してください。

行事案内

誰でも自由に参加できます。参加費無料。

☆定例新浜観察会（毎月第２日曜日）　１２月１０日、１月１４日

集合：　東西線行徳駅前　午前１０時
解散：　行徳野鳥観察舎　午後３時頃
担当：　東　良一[redacted]
共催：　日本野鳥の会東京支部、千葉県野鳥の会
持物：　昼食、飲み物、バス代（大人３４０円、子供１８０円）

こがらしが吹いて、あたりは枯草色。でも江戸川の干潟ではハマシギたちがせわしく泥をつつき、あし原にはオオジュリンがひっそりと隠れています。河口付近で昼食後、バスで保護区へ。スズガモの大群に会えるといいですね。防寒のしたくはしっかりとしてお出かけください。１月１４日はニューイヤーカウントです。

☆定例園内観察会（毎月第１・３日曜日）１２月３日・１７日、１月７日・２１日

集合：　行徳野鳥観察舎前　午後１時半
解散：　〃　午後３時半頃
担当：　観察舎　蓮尾
協賛：　友の会

保護区の中の観察路をひとまわりします。ススキやアシの綿毛が、北風にのって新天地へと旅立つ季節。高層マンションも視界から消え、周囲は冬の大草原です。セイタカシギやチュウヒに会えるでしょうか。雨天中止。

☆水鳥カウント　１月１５日（月・祝）

行徳周辺の水鳥の数を数えます。参加ご希望の方は東[redacted]までご連絡下さい。

☆丸浜バードリバーを調べよう　毎月第３または第４日曜

集合：　行徳野鳥観察舎　午前１０時
解散：　〃　午後３時頃
問合わせ先：蓮尾[redacted]

担当者の都合がつく日に実施しますので、参加ご希望の方はお問い合わせ下さい。長靴、タオル、ビニール手袋が必要。丸浜川と新池の底泥を採取し、中にいる生物を探します。午後からは観察舎でソーティングをしています。

☆クリスマス会　　１２月２３日（土・祝）

夕方からケーキとプレゼント交換、という例年のパターンに加えて、今年は芝生で野外劇をしてみよう、ということになりました。劇というよりはごっこ遊びで、遊びながら水がきれいになるしくみを考えようというものです。出演者（２才以上）大募集中。観客も大募集中。ぜひお出かけください。

「私、セイタカシギのお姉さん。足が長くて、とってもかっこいいでしょ。」

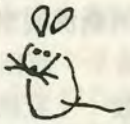
主役兼語りは桑名佐由巳さんにお願いしました。名演技をお楽しみに。

その１　野外劇「丸浜川の生きものたち」　雨天は２４日（日）に延期

練習　午前１０時から約１時間　行徳野鳥観察舎集合。いったん解散。

本番　午後２時から・午後３時から　の２回。午後４時ころ解散。

その２　クリスマス茶話会



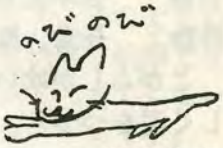
集合：行徳野鳥観察舎　午後５時

解散：　〃　　午後７時頃

会費：１人３００円（ほかに３００円程度のプレゼントを持参）

問合わせ：蓮尾[redacted]

☆初日の出とスズガモの群れを見る会　　１月１日（月・祝）



集合：行徳塩浜海岸　　午前５時５０分

解散：行徳野鳥観察舎　午前８時頃

海宝佐記子 画

ＪＲ京葉線市川塩浜駅から徒歩約８分。東西線行徳駅からは、駅前の大通りをまっすぐ南へ、徒歩約３５分。車の方は湾岸道路千鳥町交差点を海の方へ折れ、京葉線に沿ってすぐ右へ行くと、つきあたりが海岸。

カモの大群を見ながら初日の出を待ちます。寒いので身ごしらえはしっかりと。例年どおりおしるこや豚汁を作ってお待ちしています。

編集後記

☆長いこと編集にたずさわってこられた東馨子さんが今号からご都合で引退されます。本当にありがとうございました。またおひまができたらどうぞよろしく。代わって桑名佐由巳さんがご協力くださるとのことですので、心強く思っております。

コタツの中から八つの目がにらんだ、と書きたくてのぞいたら、ネコどもは一匹もいなくて、寒がり犬のトラキチが丸まっていました。ネコは喜び庭かけまわる？（純）

☆友の会会報としての「すずがも通信」がどうあるべきか、この機会に考えなおす必要がありそうです。ご意見をお待ちしています。これからもよろしく。（Ｄ）

すずがも通信　Ｎｏ．５９　　１９８９年１２月１日発行

発行所　行徳野鳥観察舎友の会　　年会費　一般1000円、ジュニア500円

発行人　東　良一　[redacted]

事務局　[redacted]

編集　清水大悟、蓮尾純子　　編集協力　市川　拓、桑名佐由巳

行徳野鳥観察舎　[redacted]